大学選手権準決勝～京都産業大学を下して決勝進出

年末の準々決勝で筑波に 45 対 7 で快勝した明治は同じく準々決勝で早稲田戦を 65 対 28 で下した京都産業大学と 1 月 2 日に国立競技場で対戦しました。

戦前の予想は関西チャンピオンの京産大有利を伝えるスポーツ新聞やネット記事が大半でした。実際に私もかなり厳しい戦いで、どちらが勝っても接戦と思っていました。

ただ、最終的には明治が勝つのではないかと考えていました。その理由は、ラインアウトやスクラムのセットプレーでは五分に戦えれば、リザーブを含めた選手層の厚さでは明治が上回り総合力で勝利できるという見立てでした。加えて廣瀬キャプテンが復帰すれば、これまでとは全く違ったチームとなるというプラス材料があったからです。

大晦日の登録メンバー発表（メンバー発表はキックオフの 48 時間前）を見て、期待は確信に変わりました。また、京産大のメンバーからスクラムの要となる 3 番の選手（留学生）が登録外となり、明治の方は廣瀬キャプテンが復帰していました。明治の登録メンバーは「これで負けたら仕方がない」と言えるほどのベストメンバーでした。

試合の方はすでに結果をご存知の方が大半でしょうが 52 対 32 で明治が快勝。

勝因は色々あるかと思いますが、試合を通じて常に先行してことです。本来であれば京産大がやりたかったような展開で試合を進めることができました。

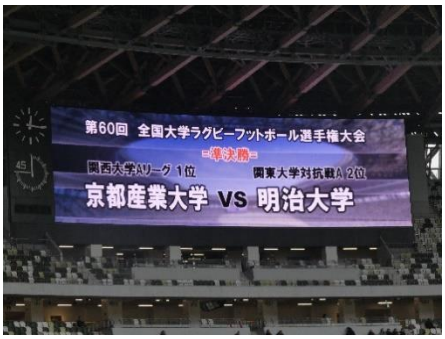
京産大にとって残念だったのは、攻撃の起点となる 10 番の選手が開始早々に負傷交代したことです。これで京産大は大きくゲームプランの変更を余儀なくされました。一方、明治の方は廣瀬キャプテンが復帰したことで、ゲームメーカーが 3 人になりました。その結果、攻撃は多彩で、短いパスも交え、素早いものでしたから、京産大はディフェンスの的を絞ることができませんでした。

また、修正力の高さも京産大を上回っていました。前半が終わってロッカールームに引き上げるときに松下選手と廣瀬キャプテンが主審の大澤レフェリーにスクラムなどについて確認を行い、コミュニケーションを取っていました。

京産大はノックオンなども頻発し、試合を有利に進められました。また、京産大の脅威となる留学生のアタックをことごとく止めていました。その結果、京産大は思うような攻撃ができず、明治からの得点はモールによるものにとどまりました。

これでいよいよ 13 日の土曜日は国立競技場で帝京大と決勝戦で対戦します。
帝京大は盤石と言われており、前評判は帝京有利です。
しかし、福田キャプテンの下で優勝した時も、あの時は天理大学有利でした。こういう時に力を発揮するのが明治です。チャレンジャーとして良い準備をすれば、福田組の再現ができるのではないかと信じてやみません。

国立地域支部　越智　浩治
（1984 年商学部卒）



GATE 4

京都産業大学
明治大学
18 前半 26
12 後半 26
30 合計 52